

雑誌における漢語接尾辞「系」の 前接要素の量的増加と質的拡大 ——戦後から 2000 年まで——

黒 田 聡 実

1. はじめに

従来、漢語接尾辞の前接には名詞を使用することが一般的であった。本稿で取り上げる漢語接尾辞「系」についても、戦前の雑誌において以下のように用いられている。

- (1) 糖業連合会の紛擾 果して三井系の横暴に起因するか、東洋製糖脱会の真意如何
『無名通信』1911 年 11 月

- (2) 淋巴線の作用 血管系と血行
『教育画法』1916 年 12 月

- (3) 薩派・宇垣系、民政党官僚系 政支の一部 軟論派総登場の山本内閣運動 陸海軍新興勢力への挑戦と政友会の動き
『解剖時代』1933 年 4 月

(1) ～ (3) にみられるように、戦前は総じて漢語接尾辞「系」の前接に政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名などを表す名詞を使用している傾向にある。加えて、学術的な専門用語を表す場合もある。しかし、1970 年代以降では以下のような例がある。

- (4) ブラウン系のシャドーで、はれぼったいまぶたをカバー
『週刊女性』1977 年 09 月

- (5) 食 ing 金萬福の店 本人も料理も、実はさっぱり、すっきり系。中華の神髓に迫れるか
『VIEWS』1993 年 10 月

(6) the voice 嵐 嵐らしい “クセになっちゃう系” の曲だよね！

『ザテレビジョン』2000年7月

(4)～(6)のように、戦後から2000年までの間、前接に使用される名詞の幅が広がり、政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名にとどまらず、色や植物、食べ物といった日常生活で使用される名詞まで見られるようになった。また、前接に名詞以外の品詞や句が使用される例も見られるようになり、戦後からおおよそ50年の間において、漢語接尾辞「系」の前接要素は拡大している。

先行研究では、中島晶子(2010)が、新語および臨時的につくられる語や語句を新造語と呼び、その新造語における「系」の用法を考察している。また、連菁(2022)が「系」の前接句をそれぞれ分類し、形態的特徴と意味的特徴を述べているほか、山下喜代(2013)(2015)や大志民彩加(2020)が認知言語学の観点から「系」の意味拡張のネットワークについて論じている。ところが、前接要素の種類が増加した時期や、戦前にはなかった前接要素の具体的な出現時期や広まっていった時期について論じているものは極めて乏しい。そこで、本稿では戦後から2000年までの雑誌を対象に、前接に用いられる品詞や句の通時的な調査を行なう。そして、異なり語数や用例をもとに、戦後から約50年で、漢語接尾辞「系」の前接要素がどのような量的増加と質的拡大⁽¹⁾の様相を見せているかを明らかにしたい。なお、用例中の太字と下線はすべて筆者による。

2. 用語の説明と各国語辞典における「系」の記述

本節では、本稿で用いる「漢語接尾辞」の説明と、各国語辞典における「系」の記述について述べる。

2-1. 漢語接尾辞

本稿で用いる漢語接尾辞とは、字音であり、なおかつ、語基に後接し、独立して使用されることがないものを指す。「漢語系接尾辞」「漢語由来の接尾辞」など呼び方はさまざまあるが、本稿では「漢語接尾辞」に統一する。接尾辞については『日本語学研究事典』(2007)の「接辞」の項目において次のように説明されている。

語構成要素の一種。たとえば、「お話」「春めく」「うれしがる」という語は、「お・話」「春・めく」「うれし・がる」と二つの語構成要素に分けることができるが、それらのうち、語の意味的な中核をなし、単独で語を構成することもできる要素（「話」「春」「うれし」）を「語基」（base）と呼ぶのに対し、単独で語を構成することができず、必ず語基と結合して形式的な意味を添えたり（「お」）、一語全体の品詞を決定したりする（「めく」「がる」）要素を指す。（中略）接辞は、語基の前に位置する「接頭辞」（prefix）と、語基の後ろに位置する「接尾辞」（suffix）とに大きく分けられる。（中略）接辞の機能に関しては、(1)語の品詞を決定する（場合によっては語基の品詞性を変える）、(2)語基に何らかの意味を付け加える、の二種類があり、接尾辞は両機能を有することが多いが、「大きさ」「高さ」などの「さ」や「歩き方」「作り方」などの「方」のようにほとんど機能(1)しか持たないものもある⁽²⁾。

本稿における接尾辞は上記の引用にならって、独立して使用されることがないものとする。したがって、名詞として用いられる「系」については触れない。

2-2. 各国語辞典における「系」

各国語辞典における「系」の語釈と用例を取り上げる。取り上げた国語辞典はいずれも用例を掲載し、かつ2000年代に出版されたものである。後述の収集対象とする用例の条件が現在を基準としているため、引用に使用した版は執筆時点において最新のものとした。各国語辞典の「系」に関する記述の引用を次に示す表1にまとめた。

表1 各国語辞典における「系」の語釈

デジタル大辞泉 （書籍版は2012）	2 名詞に付いて、一つのまとまりのある関係にあることを表す語。「理科―に進む」「外資―の企業」「太陽―」「銀河―」「MKS単位―」 〔補説〕 俗語では2を発展させて、「ギャル系の話し方」「ビジュアル系バンド」「いかにも体育会系の若者」「癒（いや）し系」などと用いる。
学研現代新国語辞典改訂 第6版（2017）	「一続きの関係」「系統」「すじ」などの意。「太陽―」「外資―」

広辞苑第7版（2018）	①一つづきにつながったもの。いとすじ。ちすじ。「イタリアー移民」 ②組織だった部類。また、その部門。「文科ー」
岩波国語辞典第8版（2019）	①いとすじ。すじ。ひも。つながり。一つづきの関係をなすもの。「傍系・母系・太陽系」 ②体系（としてとらえられるもの）。システム。「力学系・神経系」
新明解国語辞典第8版（2020）	〔自然科学で〕互いに作用し合ったり関連を持ったりする多数の物から成る一まとまり。システム。「太陽ー・銀河ー・生態ー・単位ー…」
明鏡国語辞典第3版（2021）	ある系列をなしてつながるもの。また、ある特性をもってまとまるもの。「太陽ー・神経ー」「外資ー・体育会ー・出会いー」
新選国語辞典第10版（2022）	㊦①まとまり。システム。「体系・太陽系・神経系」 ②すじみち。つながり。「父系・日系・理系」 ㊦…のほうに関係がある。「体育会ーのサークル」「コンビニーの店」
三省堂国語辞典第8版（2022）	①（一つのものから分かれた）系統。「左派ー・医ー大学・多産ー」 ②〔俗〕ある特色をほかしてさすことば。「いやしーのタレント」「かわいいーの男の子」

いずれの国語辞典においても「系統」や「血筋」、「一つのつながりやまとまり」を表す語として扱われている。『三省堂国語辞典第8版』では「ある特色をほかしてさすことば」と語釈がついているほか、「デジタル大辞泉」では「一つのまとまりのある関係」を表すところから発展した用例を挙げている。表1にまとめた各国語辞典の語釈から、「系」は「系統」や「血筋」、「一つのつながりやまとまり」を表すのが従来からある用法であるといえる。また、各国語辞典の用例から、「系」の前接には名詞あるいは漢字1字の字音を置くことが一般的であるとみられる。したがって、『三省堂国語辞典第8版』の用例にあがっている「かわいい系」のような、前接に名詞や漢字1字の字音以外の要素を置く用例は国語辞典上において取り上げられることが少ない。

3. 調査方法、収集対象とする用例

用例の調査は「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索」⁽³⁾を使用する。フリーワード検索の「すべてを含む」にチェックをしたうえで、「系」と入力し、「除く」欄に「系図」「系統」「系譜」「系列」を設定した。「発行日」に設定した期間は1946年1月1日から2000年12月31日である。画像1は「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索」のフリーワード検索⁽⁴⁾の画面である。

画像1 「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索」

(出典: <https://www.oya-bunko.com/search/freeword>)

収集対象とする用例の条件を次のように定める。まず、表1の「理料系」「外資系」のように、①語基+接尾辞で構成されていると判断できるものである。次に、「理系」「母系」といった②漢字1字の字音+接尾辞の構成をとるものは、原則、前接要素が現在一般に使用される文中において、単独で語となる読み方をするもののみを用例として収集する。例えば以下の用例があてはまる。

(7) 味、雰囲気、価格3拍子揃った洋系・和系の人気店をセレクト。

『Hanako』1998年12月

「洋系」「和系」の場合、それぞれの前接要素は現在「洋っぽいもの」「洋な感じ」「和っぽいもの」「和の感じ」というように単独で使用されている⁽⁵⁾。

例外として、学術的な専門用語、前接が数字やアルファベットなどの記号、色名、略語の場合は収集対象に入れる。なお、読み方が不明なものは用例として収集しない。先に挙げた「理系」は「理科系」を略したものであるが、「母系」の前接要素「母(ぼ)」は文中において単独で語として成立しない読み方である。したがって、本稿において「理系」は用例の収集対象となり、「母系」は収集対象とならない。また、③明確に名詞の一部となっている語は収集の対象外とする。例えば、除外対象にあげた「系図」「系統」「系譜」「系列」や、「直系」「一系」「体系」「大系」は用例の収集対象としない。「除く」欄に「○系」のかたちをとるものを設定しなかったのは、用例の取りこぼしを防ぐためである⁽⁶⁾。「大雪山系」「桂川水系」のように、「○○山系」「○○水系」とあるものも収集の対象外である。

用例の収集にあたっては、文脈から上記①②③の条件を満たしているかを判断基準とする。収集の対象とするのは、検索結果に表示される「タイトル」項目のみである。

4. 調査結果

本節では、異なり語数と用例の2つの側面から、漢語接尾辞「系」の前接要素の増加と拡大に関する調査の結果を述べる。調査方法と収集対象とする用例の条件は3節に記した通りである。なお、表で使用する数値、用例はすべて2024年10月31日時点のものである。

4-1. 前接要素の異なり語数

以下の表は、「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索」(以下、「Web OYA-bunko」と表記)の検索結果の数と異なり語数である。

表2 「系」の検索結果の数と「前接要素+系」の異なり語数

年	検索結果の数	異なり語数	年	検索結果の数	異なり語数
1946	2	—	1951	4	1
1947	2	—	1952	8	2
1948	2	—	1953	8	1
1949	2	1	1954	6	1
1950	3	—	1955	8	2

1956	11	4	1979	196	55
1957	9	2	1980	183	46
1958	7	2	1981	110	40
1959	18	6	1982	164	59
1960	22	10	1983	154	49
1961	5	1	1984	227	71
1962	6	2	1985	239	72
1963	9	1	1986	129	51
1964	18	1	1987	281	98
1965	10	2	1988	348	92
1966	11	5	1989	368	91
1967	36	10	1990	413	111
1968	42	12	1991	490	222
1969	29	10	1992	456	130
1970	24	5	1993	464	157
1971	24	7	1994	534	193
1972	47	18	1995	718	247
1973	58	15	1996	820	366
1974	68	22	1997	1173	402
1975	115	33	1998	1737	635
1976	152	44	1999	1519	535
1977	126	46	2000	1383	579
1978	181	46			

検索結果の数の合計は 13179 件である。異なり語数については、丸括弧を除く「 」や [], < > といった括弧、ダブルコーテーションの有無、漢字、ひらがな、カタカナといった異なる表記のものはそれぞれ区別し別々にカウントした。例えば、

“癒し系”／「癒やし系」／癒し系／「癒し系」／イヤシ系

の 5 つが検索結果に表れた場合は、それぞれ区別してカウントするため、異なり語数は 5 となる。述べ語数については、検索結果に同一の索引タイトルが重複して表示されるケースが散見されたため、本稿では取り扱わないこととした。また、1946 年、1947 年、1948 年、1950 年は検索結果が表示されたものの、漢語接尾辞ではなかったため、異なり語数を明記していない。そのため、実際に取り扱うデータは 1949 年から 2000 年までである。

表2から、1970年代から異なり語数が徐々に増加し、1990年代には100件を超え、1998年以降は500件を上回っていることが読み取れる。特徴としては、1980年代、1990年代のそれぞれ後半に異なり語数の増加が顕著に見られることである。

検索結果の数と異なり語数の増加要因には、「Web OYA-bunko」の収録雑誌の増加と使用される前接要素の増加による新造語があると考えられる。前者は収録雑誌の増加によって、雑誌のジャンルの幅が広がり、特定のジャンルで使用される傾向のある前接要素が登場するようになったことを指す。後者は、前接要素に既存あるいは新規の名詞や名詞以外の品詞、句などを置き、それらと漢語接尾辞「系」を組み合わせることで新たに作られた造語のことを指す。いずれにせよ、異なり語数の増加は、今まで前接要素にならなかったものが接続するようになったことを表している。

次に示す表3は、1949年から1969年までの用例の出典元である雑誌の一覧と、1987年の用例の出典元である雑誌の一覧である。1987年を選択したのは漢語接尾辞「系」の用例を収集できる雑誌のジャンルがある程度固まってきたためである。雑誌名は「Web OYA-bunko」に倣った。

表3 用例の出典元である雑誌の一覧（順不同）

年	雑誌
1949 ～ 1969	週刊朝日、心、日本週報、ペン（学苑社）、読売新聞、サンケイグラフ、週刊読売、漫画読売、経済往来（経済往来社）、新潮、財界、芸術新潮、時の窓、朝日ジャーナル、週刊朝日、週刊新潮、週刊現代、毎日グラフ、中央公論、評、週刊文春、マドモアゼル、評、週刊サンケイ、サンデー毎日、自由世界、女性自身、平凡パンチ、国際報道、朝日ジャーナル臨増、週刊大衆、新評、歴史読本、世界の動き（外務省）、サンデー毎日、日本読書新聞、時、今橋ニュース、20世紀、富士ジャーナル、宝石（光文社）、現代、サンデー毎日臨増、情況臨増、文藝春秋、アルプス・シリーズ、ゼンボウ
1987	財界展望、政界ジャーナル、正論、DECIDE、Newton、an・an、週刊明星、週刊文春、アサヒグラフ、朝日ジャーナル、女性セブン、噂の真相、世界、週刊新潮、ニューズウィーク日本版、クロワッサン、スコラ、週刊平凡、週刊女性、UTAN、政界、創、婦人倶楽部、翻訳の世界、MORE、サンデー毎日、ゼンボウ、NEXT、プレジデント、宝石（光文社）、週刊東洋経済、週刊プレイボーイ、サンデー毎日、財界、OMNI、警察時報、ブレーン、POTATO、オリコン・ウィークリー、アサヒ芸能、週刊サンケイ、週刊ポスト、週刊時事、ELLE JAPON、FRIDAY、週刊ダイヤモンド、ザテレビジョン、スタジオボイス、宝石（光文社）、週刊エコノミスト、週刊朝日、週刊宝石、経済界、エフ、産業新潮、調査情報、朝日ジャーナル、FLASH、実業の日本、DIME、週刊時事、週刊サンケイ、流通信、毎日グラフ、選択、知識

「Web OYA-bunko」における、1949 年から 1969 年までと 1987 年の用例の出典元である雑誌の違いはジャンルの幅にある。1949 年から 1969 年までは週刊誌をはじめ、経済誌や文学誌などジャンルがある程度限られていた。一方、1987 年は週刊誌や経済誌、ファッション誌、生活情報誌、女性誌ほかさまざまなジャンルに広がりが見られるようになった。さまざまな雑誌のジャンルにおいて用例が収集できるようになったということは、漢語接尾辞「系」の使用が広まっていることの表れであると考えられる。

4-2. 前接要素の用例

4-1 では異なり語数をもとに前接要素の増加について述べた。本項では具体的な用例を挙げながら、前接要素の拡大について見ていきたい。次の表 4 は 1949 年から 1975 年までの 26 年間で収集できた用例をまとめたものである。なお、紙幅の都合により前接要素の数が少なく、かつ拡大傾向をさほど示していない年はまとめることにした。

表 4 1949 年から 1975 年までの用例（順不同）

年	用例
1949 ～ 1959	スイス系、カトリック系、北鮮系、太陽系、北方系、旧改進黨系、ボリエステル系、諏訪系、銀河系、革新系、中共系、理工系、文科系、アクリル系、メダマ系、工科系、太陽系、総評系、全労系、帝大系
1960	東銀系、文科系、ヨーロッパ系、KR テレビ系、日本テレビ系、太陽系、共産主義者同盟系、革命的共産主義者同盟系、海・陸系、法文系
1961 ～ 1966	石油系、サリドマイド系、理工系、事務系、韓国系、山口組系、中国系、日共系、三菱系、技術系
1967	外国系、カトリック系、革新系、ユダヤ系、社会党系、反日共系、三派系、外資系、公明党系、公明系
1968	反日共系、三派系、3 派系、東北アジア系、インド系、欧州系、理工系、ユダヤ系、王子系、商社系、代々木系、反代々木系
1969	三派系、軟派系、ミッション系、王子系、反日共系、“生態系”、反代々木系、外資系、創価学会系、反戦青年委員会系
1970	創価学会系、体育系、銀河系、技術系、事務系
1971	財閥系、外資系、松下系、日共系、フジテレビ系、反日共系、メキシコ系
1972	米国系、新左翼系、ラテン系、中国系、ユダヤ系、アナ系、福田系、多産系、保守系、革新系、浄土真宗系、右翼系、八幡系、富士系、旧富士系、旧八幡系、「行動系」、「情報系」

1973	ユダヤ系、日共系、共産党系、NTV系、三和系、TBS系、外国系、住友系、米国系、王子系、米系、関西系、理工系、社会科学系、世界救世教系
1974	アルタイ系、南方系、理科系、全販連系、全購連系、生態系、欧州系、革マル系、日共系、山口組系、関西系、住友系、野党系、三菱系、NET系、アイルランド系、外資系、松葉会系、カトリック系、事務系、京都市十全会系、保守系
1975	外資系、八幡系、富士系、総評系、同盟系、医科系、三井系、“美濃部系”、同友会系、理工系、タール系、保守系、民族系、TBS系、CIA系、文科系、社会党系、東映系、NTV系、生態系、フジTV系、米資系、住友系、関西系、日共系、NET系、出版社系、中核系、文科系、革マル系、フジ系、理工医系、医歯系

*年をまとめた用例はおおむね出現順である。1950年は用例なし。

1949年から1975年は戦前と傾向が似ており、漢語接尾辞「系」の前接に政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名などを表す名詞を使用している。ほかに「太陽系」「銀河系」「生態系」のように学術的な専門用語を表す場合にも使用している。表4から、雑誌においては少なくとも戦後から30年ほどの間、前接要素に使用される品詞は限られた名詞のままであったと推定される。しかし、1975年以降の用例から徐々に前接要素の拡大が見られるようになっていく。以下の表5は1976年から1979年までの用例をまとめたものである。

表5 1976年から1979年までの用例（順不同）

年	用例
1976	民族系、太陽系、外資系、富士系、関西系、新日鉄系、 <u>TBS系</u> 、松葉会系、 <u>東京12ch系</u> 、山口組系、新聞社系、児玉誉士夫系、小佐野系、 <u>読売系</u> 、 <u>朝日系</u> 、 <u>NET系</u> 、レコード会社系、 <u>NTV系</u> 、アメリカ系、銀河系、 <u>東京12チャンネル系</u> 、新左翼系、 <u>フジ系</u> 、住友系、メジャー系、 <u>ニッポン放送系</u> 、キリスト教系、三菱系、ドイツ系、 <u>毎日放送系</u> 、 <u>朝日放送系</u> 、田中角栄氏系、 <u>関西テレビ系</u> 、東洋系、有機合成化学系、中国系、革新系、 <u>朝日放送—NET系</u> 、財閥系、共産党系、勸銀系、岩井系、 <u>毎日放送系</u> 、保守系
1977	<u>フジ系</u> 、アングラ系、 <u>NET系</u> 、 <u>TBS TV系</u> 、アメリカ系、小佐野系、理科系、財閥系、「協会系」、 <u>NET・朝日放送系</u> 、外資系、民族系、 <u>読売テレビ系</u> 、 <u>毎日放送系</u> 、 <u>フジ・関西テレビ系</u> 、医歯系、革マル派系、ファンタシウム系、 <u>朝日放送系</u> 、ディオール系、 <u>テレビ朝日系</u> 、 <u>関西テレビ系</u> 、ツングース系、共産党系、日共系、 <u>関西TV系</u> 、 <u>TBS毎日放送系</u> 、 <u>TBS系</u> 、 <u>読売系</u> 、 <u>毎日系</u> 、独立系、山口組系、太陽

	系、 <u>読売 TV 系</u> 、技術系、 <u>NTV 系</u> 、洋楽系、 <u>毎日放送系</u> 、 <u>ブラウン系</u> 、 <u>第一勧銀系</u> 、南方系、モンゴル系、アフロ系、新日鉄系、日本系、 <u>日本テレビ系</u>
1978	<u>TBS 系</u> 、 <u>テレビ朝日系</u> 、 <u>関西テレビ系</u> 、元山口組系、日展系、左翼系、保守系、共産党系、文科系、外資系、共産系、民族系、「銀河系」、柑橘系、 <u>フジ系</u> 、 <u>朝日放送系</u> 、銀河系、技術系、 <u>NET 系</u> 、心臓動脈系、電鉄系、富士系、八幡系、 <u>フジテレビ系</u> 、小田急系、 <u>日本テレビ系</u> 、 <u>TV 朝日系</u> 、理工系、プラスチック系、都庁共産党系、静脈系、松田組系、スウェーデン系、アラブ系、革新系、教会系、中国系、 <u>TBS・毎日系</u> 、旧王子系、 <u>NTV 系</u> 、太陽系、「神経系」、ゴスペル系、医科系、政府系、 <u>読売系</u>
1979	ラテン系、左翼系、共産党系、民族系、 <u>グリーン系</u> 、三菱系、原理研系、新左翼系、 <u>日本テレビ系</u> 、山口組系、 <u>TBS テレビ系</u> 、 <u>フジ系</u> 、有機質系、太陽系、ピンク系、 <u>NTV 系</u> 、 <u>テレビ朝日系</u> 、西武系、 <u>朝日系</u> 、 <u>TBS 系</u> 、北方系、 <u>日本 TV 系</u> 、 <u>TV 朝日系</u> 、 <u>朝日放送系</u> 、 <u>東京 12ch 系</u> 、 <u>関西テレビ系</u> 、生態系、 <u>フジテレビ系</u> 、 <u>フジ TV 系</u> 、豊後系、保守系、 <u>関西テレビ系</u> 、松下系、「民族系」、「外資系」、銀河系、民謡系、医歯系、ドイツ系、歯科系、外資系、理科系、視覚系、自民党系、台湾系、フォーク系、北京系、農協系、政府系、日医系、三井系、共産系、ベトナム系、理系、文系

* 1976 年の「読売系」「朝日系」、1978 年の「読売系」、1979 年の「朝日系」は、検索結果の備考欄にテレビ放送局やテレビ番組を表す単語があったため、2 重下線とした。

1976 年から 1979 年までの用例の傾向は、漢語接尾辞「系」の前接に政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名などを表す名詞を使用していること、学術的な専門用語を表す場合にも使用していることについては 1975 年までとほぼ変わっていない。一部、音楽関係で「洋楽系」や「ゴスペル系」が見られる程度である。しかしながら、用例の 2 重下線で示したように、テレビ放送局を前接に置いている用例が多く見られた。これは、「Web OYA-bunko」に収録された雑誌がテレビ番組についての記事を多く掲載していたことに起因する。

表 5 で重要な点は、1977 年の用例で四角囲みをした「ブラウン系」と 1979 年の「グリーン系」である。本稿で調査した限り、色名を前接要素とする例は 1977 年の『週刊女性』が初出であった。1979 年の「グリーン系」は『クロワッサン』が出典元である。そして、1977 年以降は漢語接尾辞「系」の前接に色名を置く用例が見られるようになる。1980 年代の

用例は、漢語接尾辞「系」の前接に政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名などを表す名詞を置く用例が多くを占めていたものの、前接に色名を置く用例が複数あった。「ブラウン」や「グリーン」のほか、「ピンク」や「オレンジ」にも「系」がつけられていたほか、「赤系」や「茶系」といった用例も確認された。1990年代に「前接要素＋系」の異なり語数が急激に増加することを踏まえると、「色名＋系」は、色名が日常生活において使用される名詞であることから、前接要素の質的拡大にかかわる転換点の1つと考えられる。

1980年代の用例は異なり語数は増加していくものの、これまでの政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名などを表すものがまだ多く、それらから外れたものは少ないままであった。そのため、次の転換点は1990年代である。以下の表6は1993年の用例である。

表6 1993年の用例（順不同）

グレー系、長銀系、連星系、銀河系、化学系、太陽系、ブルー系、体育会系、中国系、パイリンガル系、役者系、スポーツ界系、テレビ朝日系、TBS系、フジテレビ系、日本テレビ系、外資系、理工系、“超”体育会系、ラテン系、政府系、アイドル系、生態系、ライベックス系、三菱系、ポップス系、H系、エッチ系、フジ系、山口組系、植物系、ブラジル系、マレー系、循環器系、文科系、理科系、ユダヤ系、朝鮮総連系、事務系、官庁系、ピンク系、オークル系、農林系、ブラウン系、ヒスパニック系、サモア系、服飾系、TX系、韓国系、スーダラ系、スライス系、オークラ系、グランジ系、ホテル系、中南米系、タクマシ系、テレビ東京系、ヒップ・ホップ系、血管系、混合系、革新系、クラブ系、アート系、アメリカ系、インディーズ系、アジア系、トルコ系、教会系、アイドル系、技術系、民主党系、原色系、雪印系、団体系、ビジュアル系、電鉄系、カメラ屋系、スッキリ系、チェーン店系、統一教会系、ロック系、苦勞人系、宗教系、保守系、福建系、ガテン系、クルド系、寒色系、“統一教会系”、旧共和党系、情報系、フジTV系、ロシア系、代理店系、上海系、先住民族系、ジャニーズ系、ゴージャス系、ホモ&レズ系、フランス系、どっち系、複雑系、流通系、旧角川メディアオフィス系、“美少女系”、神経系、免疫系、肥満児系、航空系、銀行系、アミノ酸系、住友系、熊谷組系、山口敏夫代議士系、文化科学系、「ガテン系」、米国系、藤村先生（京本政樹）系、旧共産党系、イスラム系、グリーン系、「性態系」、美術系、「なにコレ？」系、すつきり系、おたく系、出版社系、ページブブラウン系、「理工系」、童顔系、娯楽系、欧米系、ヴィーナス系、事務・一般系、独立系、メーカー系、証券系、広告系、牛系、小沢系、シック系、1回分系、住吉連合系、全国東映系、イタメシ系、興銀系、ラオス系、イスラーム系、オレンジ系、理数系、“ラテン系”、自転車未来形、カトリック系、理系、文系、茶系

まず、1993年の用例ではこれまでに確認されなかった前接要素が見られるようになる。その最たる例が下線を引いた3つである。「スッキリ系」「すっきり系」はこれまでの漢語接尾辞「系」の前接要素にはなかった副詞である。また、もう1つ下線で引いた「「なにコレ？」系」は前接の「なにコレ？」が話し言葉となっており、前接要素の新たな拡大を示唆している。加えて、前接要素に用いる名詞についても、「アイドル系」や「イタメシ系」「ゴージャス系」「おたく系」というように、従来の政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名ではないタイプのものが使用されている。

次に、1994年から2000年までに「Web OYA-bunko」で確認された、名詞以外の品詞や句などを前接に置いた主な用例を以下の表7にまとめた。

表7 1994年から2000年までの名詞以外の品詞や句などを前接に置いた用例（順不同）

年	用例
1994	ややキレてる系、オモロイ系、まったり系、しっとり系、ドギツイ系
1995	サバサバ系、甘いマスク系、濃ゆ〜い顔系、ピチピチ系、ぽっちゃり系、“キリリ”系、アッサリ系、コッテリ系
1996	“エグイ系”、さわやか系、キャピキャピ系、きちんと系、アツい系、ほのぼの系、だらしな系、ザックリ系、ネバネバ系
1997	しっとり系、カッチリ系、ピンピン系、まったり系、「のほほん系」、アブナ系、懐かし系、子憎たらしい系
1998	“セクシーな野人”系、爽やか系、カワイイ系、さっぱり系、“くよくよ系”、ずっしり系、ハラハラドキドキ系、華やか系、すっきり系、しっとり系、おるおる系、かわいい系、かわいい洋服系、キラキラ系、まろやか系、“永遠の草食動物系”、かつこいい系、しっとり系
1999	超暖ったか系、ほのぼの系、トホホ系、“しっとり系”、“のほほん系”、キャピキャピ系、懐かし系、「私を見てくれ系」、「何かやる系」、大人数で騒ぐ系
2000	「ふわモコ」系、さわやか系、ばふばふ系、だらだら系、「キレイ系」、「ハラハラ系」、スッキリ系、“クセになっちゃう系”、男のコの視線クギづけ系、さっぱり系、「キレイ系」、「キレイなお姉さん」系、ほんわか系、のほほん系

1994年には「しっとり系」「まったり系」が、1995年には「アッサリ系」「コッテリ系」といった複数の副詞が確認された。1995年以降も「さわやか系」や「キレイ系」「可愛い系」「懐かし系」など、前接に副詞、形容動詞、形容詞、活用語幹といった名詞以外の品詞が使われている用例が多くはないものの見られた。

1999年には「私を見てくれ系」という用例があり、これは前接に句を接続したものである。1990年から2000年までの間は、前接要素に句を使用する例が極めて少ないため、拡大しようとしている途上であると考えられる。

名詞以外の品詞や句が漢語接尾辞「系」の前接要素に使用されるようになったこと、前接要素に用いる名詞の制限が少なくなってきたことから、1990年代が前接要素の質的拡大にかかわるもう1つの転換点である。

5. おわりに

本稿では、「Web OYA-bunko」を用いて、戦後から2000年までのおよそ50年間の、漢語接尾辞「系」の前接要素の量的増加と質的拡大について、異なり語数と用例を用いて述べた。異なり語数の面からいえることは、1949年から1969年までは各年で15件もなかった異なり語数が、1970年代から徐々に増加し、1998年以降は500件を上回っていたことである。このことから、漢語接尾辞「系」の造語力は決して低いものではない。用例の面では、雑誌については少なくとも戦後から30年ほどの間、前接要素に使用される品詞は限られた性質の名詞であったと推測される。1970年代後半に「色名＋系」が出現して以降、徐々に政治や学問、血筋、企業名、組織名、人名を表す名詞以外のものが前接に使用されるようになっていった。そして1990年代には、日常生活において用いられるような一般的な名詞、名詞以外の品詞や句などが漢語接尾辞「系」の前接に使用されるようになった。実質、1970年代後半から2000年までのおよそ25年間で、漢語接尾辞「系」を使用したさまざまな語が編み出され続けたのである。

今後は、今回調査しなかった2000年以降の雑誌における漢語接尾辞「系」の異なり語数と用例についても研究してみたい。

注

- (1) 本稿における「量的増加」は異なり語数のように、前接要素となる語あるいは語相当のものの量がどれだけ増加したのかを表す。「質的拡大」は前接要素の品詞あるいは品詞相当のものがどこまで拡大したか、また前接に用いられる要素の性質の制限はどこまで緩和されたかを表す。
- (2) 飛田良文ほか編（2007）『日本語学研究事典』明治書院、p.165 から引用。執筆者は斎藤倫明。
- (3) 「Web OYA-bunko」は明治時代からの雑誌記事索引 740 万件以上を収録している。採録期間は明治時代から現在までである。収録雑誌数は約 2000 誌、現在刊行中の雑誌は約 400 誌を採録している。（2024 年 6 月時点）
- (4) フリーワード検索の検索結果は、[記事種類] [タイトル] [発言者] [雑誌名] [発行日] [ページ] [備考] で構成されている。
- (5) Yahoo! リアルタイム検索において確認された。（2024 年 10 月 31 日時点）
- (6) ○の前接に 1 字以上の要素（仮に△とする）を置き、「△○＋系」の「前接要素＋系」が収集できる可能性があることを考慮した。

参考文献

- 中島晶子（2010）「新造語における「度」「系」「力」の用法」（大島弘子、中島晶子、ブラン・ラウル編『漢語の言語学』くろしお出版、pp.159-176）
- 山下喜代（2013）「接辞性字音形態素の造語機能」（野村雅昭編『現代日本漢語の探究』東京堂出版、pp.83-108）
- 山下喜代（2015）「漢語接尾辞「系・派」について—人物を表す派生語の分析を中心に—」（『青山語文』45、pp.112-125）
- 大志民彩加（2020）「「X 系」の多義性と意味拡張の方向性について」（『表現研究』112、pp.1-10）
- 連菁（2022）「句を包摂する接辞性字音形態素「系」について」（『東アジア日本学研究』7、pp.81-88）

使用文献・使用データベース

- 金田一春彦、金田一秀穂編（2017）『学研現代新国語辞典改訂第六版』（学研プラス）
- 新村出編（2018）『広辞苑第七版』（岩波書店）

西尾実ほか編（2019）『岩波国語辞典第8版』（岩波書店）
 山田忠雄ほか編（2020）『新明解国語辞典第八版』（三省堂）
 北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典第三版』（大修館書店）
 金田一京助ほか編（2022）『新選国語辞典第十版』（小学館）
 見坊豪紀ほか編（2022）『三省堂国語辞典第八版』（三省堂）
 JapanKnowledge Lib <https://japanknowledge.com/library/>
 松村明監修（2012）『デジタル大辞泉』（小学館、底本名『大辞泉第二版』）
 最終閲覧日：2024年10月31日
 「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引検索」
<https://www.oya-bunko.com/menu>

最終閲覧日：2024年10月31日
 （本学特別専攻生）

キーワード

漢語接尾辞、○○系、異なり語数、「Web OYA-bunko 大宅壮一文庫雑誌記事索引
 検索」